

協同労働実践交流全国集会2021 報告集 —実践から考える協同労働の価値と本質—

本号は11月13日～14日に開催された「協同労働実践交流全国集会2021」の全体会を中心に特集しました。本集会は2日間にわたりオンラインで開催し、参加者は全体会で600アクセス、分散会は318アクセスとなり、ワーカーズコープの組合員とともに、一般参加者も多く参加しました。

基調報告には本集会で議論を深めたいポイントとして、「法制定時代に、一人ひとりの組合員が、協同労働とは何かを、お互いに出し合い、話し合い、深め、考えていくための集会」と位置付けています。そこで集会準備段階から現場のリアルな現状から出発し、今後を描くために、「協同労働を実感したこと」「事業所の課題や変えていきたいこと」「どのような事業所・どういう自分になりたいか」を参加者が事前レポートとして書いています。

本号の狙いは本集会の学びを多くの人と共有することによって、実践から協同労働の価値と本質を考えることにしました。この間、本誌でも協同労働が社会的に注目されていることを特集してきましたが、本号ではすでに協同労働を実践している労働者協同組合の実践から協同労働を深めるものとしています。集会全体を通して、現場での葛藤・悩み・苦勞が多く出されるなかで、そのプロセス自身が、協同労働の持っている価値と本質があるように感じました。

「実践から考える」視点から、パネルディスカッション・座談会では現場の仲間の声が忌憚なく出されました。30分散会ならびに事前レポートにも多くの学びがありましたが、紙幅の関係で掲載できないので、それに代わり全体会や分散会の感想文を掲載することにしました。

パネルディスカッションでは、協同労働の4つの物語が語られました。センター事業団埼玉西部地域福祉事業所では、問題を抱えた当事者であった報告者の藤野さん自身のことをみんなで話し合われ、仲間に支えられながら、藤野さんの想いや心情の変化が吐露されるとともに、仲間の性格・特技・背景・生い立ちを知ることが、共に働くためには必要で

あることを提起されました。センター事業団新宿わかば地域福祉事業所では、110名在籍する事業所となり多くの課題が生まれるなかで、事業所の今後の戦略を描く上で複数のプロジェクトチームを立ち上げたことが報告されました。センター事業団さいたま南地域福祉事業所たいむでは、経営が悪く事業所の継続か閉鎖かの状況のなかで、働く仲間と全国の仲間に支えられて、経営改革に向かっていることが報告されました。北海道労働者協同組合ケアワーカーズコープわたすげでは、1年更新でリーダーが選ばれるなかで、規約もつくりみんなが協力しあってリーダーを支えていることの報告がありました。これらの実践は、仲間の想いが反響しあう試行錯誤のプロセスのなかで、協同労働を実践することとは何かを、一人ひとりの生き方や事業所が目指すあり方と重ね合わせて議論されており、各事業所で多様な協同労働観が生まれていることを感じさせるものでした。

座談会では、リラックスした雰囲気ですべて「協同労働」についての一人ひとりの想いと問いが出されました。例えば「協同労働を結果で捉えるのか、行動・意思で捉えるのか」「意見反映のあり方」「折り合いのつけ方」等です。これらの問いへの登壇者の意見として、このような問いを考えている自体、何とかしたい、解決したいという問題意識があると思うので、諦めないことが大切ではないかという議論が印象的でした。それは問題解決を効率的・合理的にリーダーが示すだけでなく、建設的に時間をかけても納得感を持って考えようとする参加者自身の姿勢こそが「共につくる」という協同の理念に溢れていたからです。座談会で話された内容とともに、誰もが意見や思ったことを言える・考えられる・伝えられる環境づくりが大切であると感じました。

特集の中身ではないですが、海外レポートと協同の広場でもそれぞれ「協同労働」を焦点に充てた報告ならびに研究会の内容を掲載しています。そこで本号は「協同労働とは何か？」を丸々1冊、深める内容となっています。

本書が「協同労働とは何か」への回答が書かれているというよりも、事実をつくる一人ひとりがどのように協同労働を考え、今後どのような協同労働による物語を紡ぎたいのかを議論する出発点になればと考えています。

相良 孝雄(協同総合研究所 事務局長)